

汲古一紙

『お茶室の書』(二)

中村素堂

広い世の中、珍しい人々が、いや有り難い人々がまだまだ方々におられるんだと思う。

翌日午前中は、大和の国、法隆寺の庫裡に伺って、山中長悦宗務長にお目にかかる。斑鳩の大寺からその一宗の名刹のご支配をなさる方とも思えない沙門本来の淡々たるお話しぶり、そのお話のまにまに客殿内の額を見る。これは何と黄檗の悦山和尚が、法隆寺の宝物を拝観した時の絶句一首。また床の間は、これまた黄檗の木庵禅師の傑作中の傑作、「人間但一僧」と墨痕淋漓。

どうしてこんな立派なものが世間に知られていないのでしょうか——と愚問。長悦師はかるやかに、さあこの室にはあまり客を通しませんから——と微笑される。

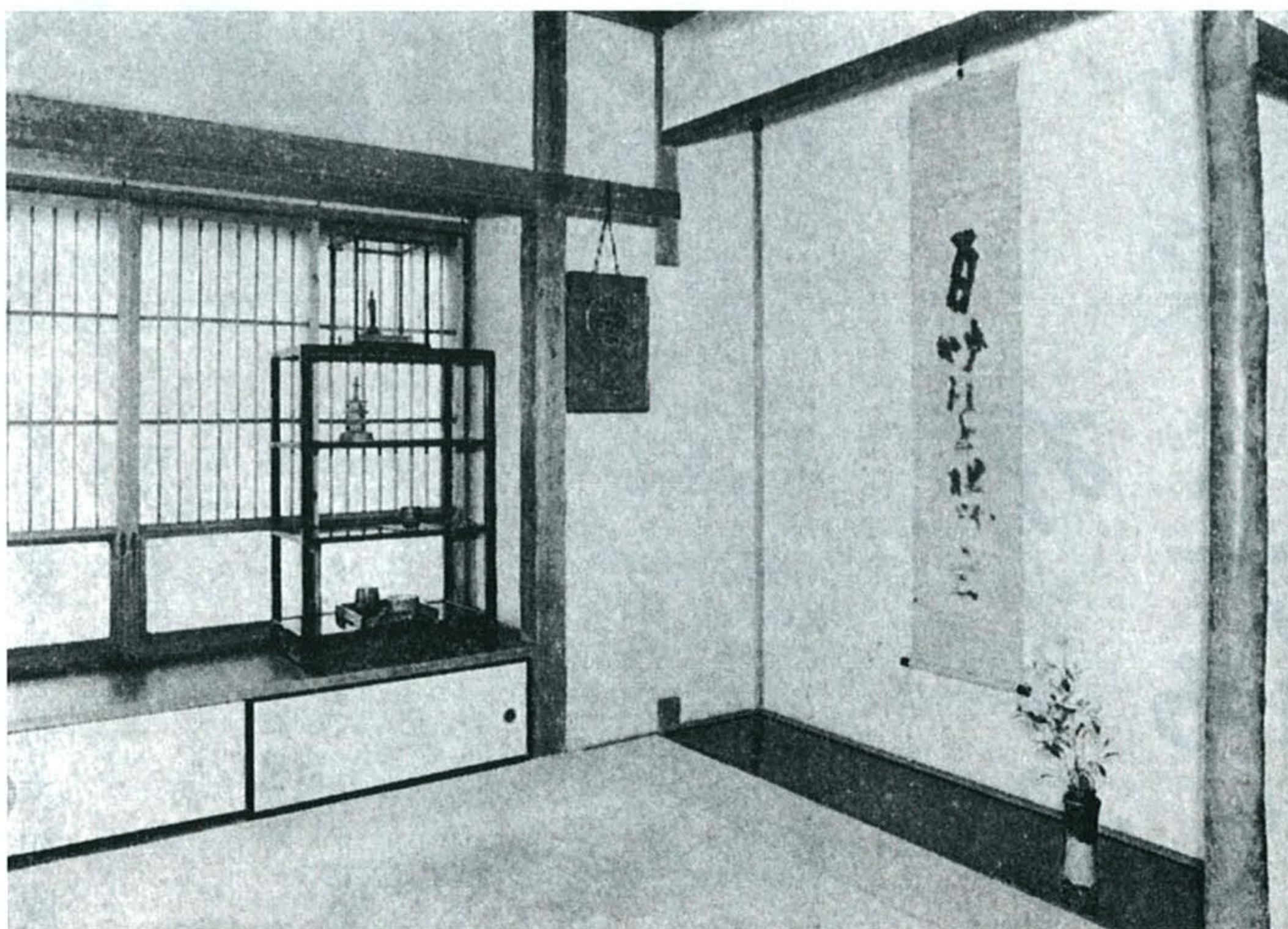
そのうち、間中定泉管長猥下もお出ましというので、奈良、いや日本の古い大寺でなければならぬ、ゆかりの深い品々が少し置かれた管長のお客間で、翰墨の話をしながら香りのよいお薄を再服頂戴して、ことごとく満ち足りたような心地で、この斑鳩寺を辞した。

面長のお顔に近眼鏡の管長さんの、もの静かなお話は大変な重職の方であられることを忘れさせるようであった。

人と書と、こんなに大きな収穫の旅をすることは、めったにあるとも思えぬ幸福感で一杯だった。

〈「仏教書道」昭和四十一年四月〉

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。



貞香山房(中村素堂先生宅)客間